

思考ツールを生かして文章を書く力を育てる  
中学校国語科の授業

吉田和樹・佐藤浩一・田村 充

群馬大学教育実践研究 別刷  
第37号 267～276頁 2020

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター



# 思考ツールを生かして文章を書く力を育てる 中学校国語科の授業

吉田和樹<sup>1)</sup>・佐藤浩一<sup>2)</sup>・田村充<sup>2)</sup>

1) 桐生市立境野中学校

2) 群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

Japanese language classes to improve students' writing skill  
with thinking tools at a junior high school.

Kazuki YOSHIDA<sup>1)</sup>, Koichi SATO<sup>2)</sup>, Mitsuru TAMURA<sup>2)</sup>

1) Sakaino Junior High School, Kiryu, Gunma

2) Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

キーワード：書くこと、思考ツール、中学校、国語科

Keywords : Writing, Thinking Tools, Junior High School, Japanese Language Classes

(2019年10月31日受理)

## 問題と目的

本研究では、意見文や感想文のように自分の考えを説明する文章を書く力を、中学生が獲得することを目指した。そのために思考ツールを活用した実践を行い、その成果を多角的に検証した。

### 1. 現状と課題

#### (1) 全国学力・学習状況調査から

まず「書くこと」について、生徒の実態を見てみよう。「書くこと」に対して苦手意識を持っていたり、実際に書けなかったりする生徒は多い。例えば平成21～29年度の全国学力・学習状況調査のうち質問紙調査には、「400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くことは難しいですか」という質問が含まれていた。これに対して「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した生徒の割合は、21年度から徐々に低下しているものの、29年度でも「そう思う」35.3%、「どちらかと言えばそう思う」26.8%であり、

約62%の生徒が苦手意識を持っている。

学力調査の国語B問題で「書くこと」領域に対応した問題の結果をみると、年度によって差が大きい。22年度(61.6%)、25年度(63.2%)、29年度(61.4%)のように比較的高い年もあるが、27年度(37.2%)、30年度(31.7%)のように低い年もある。問題によっては正答率13.9%(30年度の問題①三)ということもあり、書く力は高くない。

#### (2) 筆者の実践から

筆者自身の指導においても、生徒は意見文をどのように書いていけばよいのかが分からない、「はじめ—なか—おわり」という小学校から繰り返し学んでいる構成の型を生かせない、という様子がしばしば見られた。例えば弁論大会に向けて意見文を書く場合に、最初は意見文とはどのようなものか、どう書いていくのか分からない様子であった。そこで、

- ・過去の代表作品を例として示す。
- ・ニュースなどから題材になりそうなものを探して話

し合う。

・小学校で学んだ「はじめ—なか—おわり」という構成を思い出させる。

・「はじめ—なか—おわり」の構成にあてはめてメモを作成する。

といった手立てを踏まえることで、多くの生徒が書き始めることができた。一方、これでもまだ書きあぐねている生徒の場合、「日常で困っていることはないか」「どうすればその問題は解決できそうか」といったことを、教師と生徒が対面で対話を繰り返し、一緒にメモを作成することで、ようやく書き始めることができた。

こうした生徒の課題の背景には、教師による指導上の課題もあった。筆者自身の指導を振り返ると、

- ・意見文や記録文など様々な種類の文章の特徴を明示的に指導していなかった。
  - ・内容を発想するための手立てを講じていなかった。
  - ・メモや下書きを作ることを指導していなかった。
- などの課題が挙げられる。

## 2. 課題解決のための手立て

こうした課題を解決するために、「書く」学習の指導に三つの大きな方針を立てた。

### (1) ツールを使う

文章を書き慣れていない生徒にとって、内容を発想したり、それを適切に整理して文章の構成を考えたりすることは難しい。そうした場面では、図などの思考ツールを生かすことが、論理的な文章を書くのに有効である(椿本, 2014)。こうしたツールを使うと、自分の考えたことが外に取り出される。そうすると、頭の中だけで考えるのに比べて、メタ認知を働かせて(佐藤, 2013)、客観的に検討しやすくなる。

教科書にもしばしば載っているツールが、「マッピング(マップ)」である(図1 出典:教育出版『中学国語1』平成27年検定済)。これは中心にテーマを置いて、それに関連する連想を広げて書き込んでいくツールであり、文章を書くことが苦手な生徒でも、情報を挙げていきやすいという利点がある。しかし、そこから文章の構成メモを作ったり、観点を決めて文章を書いたりするのは難しい。

これに対して「くまでチャート」というツールは、

観点を決めて内容を整理したり、構成メモを作ったりするのに便利である(図2)。くまでの柄にはテーマ、歯には観点を割り当てて、内容を書き込んでいく(田村・黒上, 2013)。これを構成の基本である「はじめ—なか—おわり」にあてはめれば、「はじめ(不安)—なか(出会い)—おわり(抱負)」という構成メモができあがる。

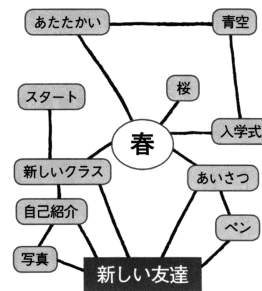


図1 マッピングの例

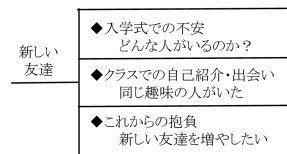


図2 くまでチャートの例

### (2) 生徒同士で発想を共有し合う

作成途中の思考ツールや文章を、生徒同士で互いに見せ合う。これにより、考えたり書いたりすることが苦手な生徒は、発想のヒントや書き方の例を得ることができる。また、こうしたことがある程度できる生徒も、発想を広げることができる。以前から筆者は「(自席の)ご近所さんに聞いてみよう」「ご近所さんが書いたものを見てみよう」と指示をして、このような活動を取り入れてきた。そこでこれを「ご近所タイム」と名付けて、本実践でも活用する。

### (3) 全ての生徒が意欲的に取り組めるために

文章を書く学習に全ての生徒が粘り強く意欲的に取り組むには、それだけの価値や魅力や面白さが学習活動になければならない。例えば以下のような工夫が考えられる。

- ・書く目的と相手(読み手)を明確に設定する。
- ・現実の読者に向けて書き、読者からコメント(感想や評価)をもらう。
- ・書く内容を豊かにする。例えば鑑賞文であれば、作品を鑑賞し互いに話し合う時間を十分とる。

また、教科書には思考ツールや文章の範例が掲載されている。しかしこうした完成形を提示されても、生徒にはどうすればよいか分からない。そうではなく、完成に向かって学習を進めていくプロセスをモデルとして提示することで、活動への取り組み方がよく分か

り、意欲にもつながる（市川，1993；Zimmerman & Kitsantas，2002）。そこで本実践では書画カメラを活用し、思考ツールの使い方を教師が実演して見せたり、書けている生徒の例を示したりする。

実践

ここまで述べてきた問題意識と手立てに基づいて平成30年度に、第一著者の勤務校の中学1年生（2学級、49名）を対象に、「書くこと」の実践を二つの単元で行った。教科書は光村図書『国語1』（平成27年検定済）であった。

1. 「おすすめの一冊」を紹介しよう（7月実施）

(1) 授業展開

本実践では、自分の「おすすめの一冊」を他の生徒に紹介するスピーチ原稿を作成し、実際にスピーチを行った。

まず、「おすすめの一冊」をどのような観点で紹介すればよいか考えた。筆者が「普段、どのように本を選んでいるか？」と問いかけたところ、「名場面」「登場人物」「ストーリー」などの観点が挙げられた。

1組では「マッピング」、2組では「くまでチャート」を用いて、観点到して紹介内容を考えていった。また書画カメラを用いて、筆者が実際にマップやくまでチャートを作成する様子を投影して見せた。

ある程度マップやくまでチャートが作成されたところで「ご近所タイム」をとり、互いの内容を見合うことで、他者の工夫にふれられるようにした。マップが広がらない生徒や、くまでチャートに書き込めない生徒は、他者の作成したものをヒントとして、自分のマップやくまでチャートに生かしている様子であった。図3のマップを作成した生徒は、小説『夜のピクニック』を薦める理由を、「ストーリー」と「評判」という二つの観点で捉えている。図4のくまでチャートを作成した生徒は、小説のタイトル（『世界の中心で愛をさけぶ』）を柄に書き込み、くまでの歯には本書を薦める理由を、「名ゼリフ・名シーン・感動した所」「流やった（注：流行った）時期」「登場人物」「宣伝文句」「ストーリー」の5つの観点で書いている。

こうした過程を経て3時間目にスピーチ原稿を作成

し、4時間目に「おすすめの一冊」を紹介するスピーチを実施した。5時間目には「ご近所タイム」で互いの原稿を読み合い、感想や「～をもっと説明してほしい」といった評価を伝え合った。

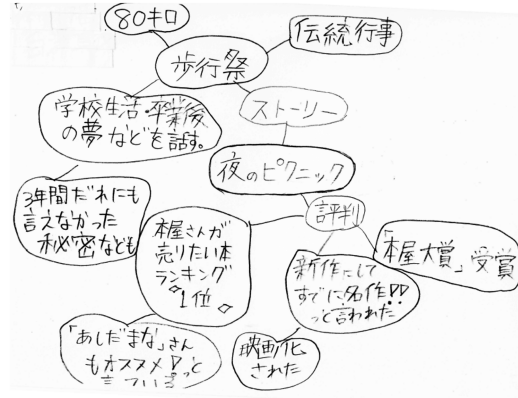


図3 生徒のマップ例

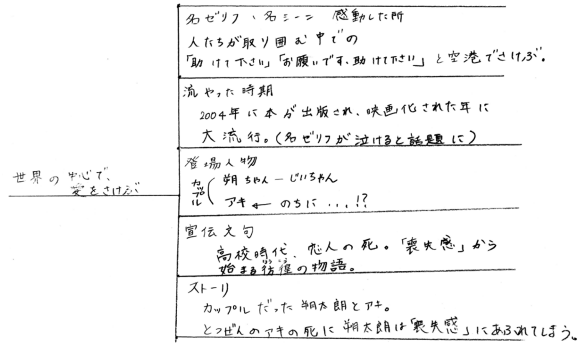


図4 生徒のくまでチャート例

(2) 手立て

本実践で用いた手立てを、「問題と目的」に即して整理する。

手立て	本実践での具体的な内容
思考ツール	・ マッピング ・ くまでチャート
ご近所タイム	・ 思考ツールを見せ合った。 ・ スピーチ原稿を読み合った。
読者	・ 他の生徒を読者に設定した。 ・ 読者から感想や評価をもらった。
書く内容を豊かにする	・ 自分の好きな一冊であり、どの生徒もその内容や魅力をよく知っていた。
書画カメラを使ったモデル提示	・ 思考ツールに教師が書き込む様子や、ある程度書けている生徒の例を、書画カメラで提示した。

### (3) 作文例

生徒が最終的に作成したスピーチ原稿の例を示す。

例1は図3のマップを作成した生徒のもの、例2は図4のくまでチャートを作成した生徒のものである(表記は原文のまま)。

#### [例1]

私の好きな本は「夜のピクニック」です。「夜のピクニック」では、高校生活最後を飾るイベント歩行祭がこの物語のふたいです。歩行祭は80キロの道のりを歩くという伝統行事で、80キロ歩いているなかで学校生活・卒業後の夢などを話しあいます。3年間だれにも言えなかった秘密も……

本屋大賞を受賞し、新作にしてすでに名作と言われました。事件らしいものは何ひとつ起きません。けれど、主人公とヒロインの運命にドキドキ・ハラハラさせられます。さっきも言いましたが事件らしい事件は何ひとつおこりません。おこりませんが、主人公とヒロインの最後がすごくしょうげき的です。すごい、ドキドキ・ハラハラさせられるのでぜひ読んでみてください。

#### [例2]

私のオススメする本は、世界の中心で、愛をさけぶという片山恭一さんの本です。この本は、高校時代、主人公朔太郎の恋人、アキの死で「喪失感」から始まる彷徨の物語です。世中(注:書名の通称「セカチュー」)は、柴崎コウさんや長澤まさみさんの映画がこうかいされた年に大流行しました。あの名ゼリフも泣けると話題になりました。その名ゼリフとは、人たちが取り囲む中、「助けて下さい」「お願いします、助けて下さい」と空港でさけぶところです。私はこの言葉を映画と本で見た時涙がとまりませんでした。恋人を亡くすなんて考えられないと思います。私は、こんな恋愛ができたらいいなと何回読んでも思います。毎回よむたびチューをして、毎回読むたびわらっている。最終的には悲しくても、前半はラブラブなカップルのお話がとてもおもしろく感動です。最後の最後、愛をちかい合う所がすごくたまらないです。本を読んだ後に、映画も見てみると、良いと思います。値段は千四百円と少し高めですが、中古でかえば百円です。この感動ラブストーリー、ぜひよんでみて下さい。

### 2. 絵画の魅力を伝えよう(11月実施)

本実践では同僚教諭が制作した絵画5点を借りて鑑賞し、一点を選んで「魅力を伝える鑑賞文」を書いた。

生徒はまず教室に展示された5点の絵画を、時間をかけて鑑賞しながら、メモを作成した。鑑賞文では単に「美しい」「感動した」などの感じ(意見)を述べるだけでなく、そう感じた根拠を示す必要がある。そこで、生徒がその作品をどう感じたのか(意見)、その感じ方は作品のどういう特徴によるのか(根拠)を分けて捉えられるように、3種類の付箋を用意した。まず鑑賞しながら大判の付箋①にメモをとった。そのメモから、直感的に思ったことや感じたこと(意見)を赤色の付箋②に、作品のどこからそうした思いや感じを捉えたのか(根拠)を青色の付箋③に書き出した。

例えば、港に停めてあるスポーツカーが描かれた作品を鑑賞した生徒は、付箋①に「遠くから見ると写真みたい。車のライトとかがめっちゃくちゃうまい」とメモした。それをもとに付箋②には「かっこいい」「キレイ」、付箋③には「車のボディのカーブと細かいところ(ライト)や水に映るとおくの光」「夜に描いているからさらに輝いて見える」等と書いた。

個人での鑑賞後、同じ絵画を選んだ生徒同士で感想を述べ合うご近所タイムを設定した。スポーツカーの作品を鑑賞していた生徒たちの間では、「迫力がある」「ヘッドライトがついているから、エンジンがかかっているのではないか」といった対話から「音」という観点が挙がった。また、背景が波止場であることから「船の汽笛も聞こえてきそうだ」という鑑賞にも広がった。このように感想の幅が広がり、感じたことをどう表現したらよいか補い合うことができた。

その後、付箋②③を学習プリントに貼り付けて整理した。また書画カメラを用いて、付箋への記入の仕方や整理の仕方を筆者が実演して示したり、生徒の付箋を投影したりした。図5では、スポーツカーの作品から受けた印象が、「光・輝き」「角度・場所」「音」という三つの観点で整理されている。

そして付箋を整理したプリントをもとに、くまでチャートを作成した。柄には「魅力を伝える鑑賞文」と記し、歯には②③の付箋紙によって立てられた観点を置いて、鑑賞文のメモを作成した。図6は図5の付

箋と同じ生徒による、くまでチャートである。くまでチャートを作成する過程で、付箋の内容や絵画を見直したりした。その結果、付箋とは少し異なり、「描き方」「色・光」「時間」という三つの観点が挙げられている。また、付箋にはなかった内容が追加されたり（例「夜の時間帯だから光が増える」）、逆に付箋にあった内容（例「渋さがかっこいい」）が削除されたりしている。また付箋ではメモ書きだった内容が文として表現し直された。例えば付箋では「水面に映るとおくの光」だったのが、くまでチャートでは「遠くの建物の光が少ない水面に反射して」と表現されている。このように鑑賞文を書くためのメモになっている。

ここまでの活動をもとに、4時間目に生徒は鑑賞文を書いた。5時間目には推敲のための「ご近所タイム」をとった。生徒が下書きを互いに読み合い、より魅力を伝えるためにはどうすればよいか色ペンで原稿に直接書いてアドバイスをし合った。

6時間目に鑑賞文を完成させた。7時間目には、自分とは違う作品を選んだ生徒と鑑賞文を交換して読み合い、魅力が伝わったか感想を話し合った。

観点	光・光線	角度・場所	音
視点・表現	車のライトの輝きを ×レイ。↑ 車のボディのカーブ を細かく描くこと が光を増やしている。	車の角度と 場所(付箋②③) 本画に見ていると 思える。	エンジン音が きこえる。 汽笛の音もきこえる。 足音がきこえている。 2. 色とセライがわかる。
説明分析 評価	夜に描かれている ように光量が増える。	車の全体を見ている。	渋いエンジン音 今までの車よりも とこがこわい。渋さか ある。

図5 生徒が整理した付箋②と付箋③

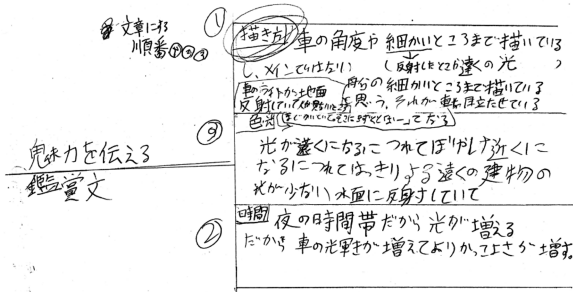


図6 付箋②と付箋③から作成されたくまでチャート

(2) 手立て

本実践で用いた手立てを、「問題と目的」に即して整理する。

手立て	本実践での具体的な内容
思考ツール	・鑑賞のための3種類の付箋 ・くまでチャート
ご近所タイム	・同じ絵画を選んだ者同士で感想を話し合った。 ・鑑賞文を推敲し合った。 ・鑑賞文を読み合い、感想を伝え合った。
読者	・他の生徒を読者に設定した。 ・読者に推敲してもらった。 ・鑑賞文を読み合い、感想を伝え合った。
書く内容を豊かにする	・絵画を鑑賞する時間を十分にとることで、作品の魅力を各自が感じられるようにした。
書画カメラを使ったモデル提示	・思考ツールに教師が書き込む様子や、ある程度書いている生徒の例を、書画カメラで提示した。

(3) 作文例

図5・図6を作成した生徒の鑑賞文を示す（表記は原文のまま）。

【例3】

この車の絵の魅力は、暗い港にボツと一台だけ、車が輝やいている所だ。

この絵からは、静かで暗い港に車のエンジン音が聞こえてくる。さらに耳を澄ませると、船のエンジン音や波の音も聞こえてくる。

周囲の光に車が照らされ、車のライトで地面が照らされている。遠くの建物の光に目をあててほしい、その光は水面に写っている。

ここに目をあてられるとさらにこの絵を楽しめると思った。この絵はメインであろう車だけでなく、その周りのものをより細かく描くことで、車がよりひき立つのだと思う。

この絵は、ぱっと見て目をつけなさそうどころまで細かく描いている。だから、「じ〜っ」と見ると、だんだんその場にいるかのように感じられる。

次に目をあててほしいのは車全体だこの絵はボディが一番の見所だ。その中でもボディの凹凸と角度だ。ボディの凹凸はすごく緻密に描いてある。例えばボンネットのもり上がりの所だ。次に角度についてだ。この車の独特なボディのはっきりとした全体像をとらえるにはこの角度が一番てきしていると思った。

次の観点は時間だ、この絵は夜の時間帯を表していることが分かる。そこから船などの光が増えることも分かる。だから車に光が反射して輝きが増す。だから車のかっこよさを強調できるのだと思う。

暗い港から色々な機械音と自然の音が混りあって聞こえてくる。この絵は見た人、誰もが迫力を感じさせる絵だ。

### 3. その他に「くまでチャート」を生かした時間

上記の二つが、思考ツールを主要な手立てとした実践である。それ以外にも、生徒がくまでチャートに慣れるよう、機会を捉えて授業に取り入れた。

6月の校外学習では、市内の施設等を見学し紹介する新聞を作成した。その準備として、施設一カ所を選んで、くまでチャートで観点を挙げて整理した。

7月の国語科「大人になれなかった弟たちに……」では、感想を書くのにくまでチャートを用いた。くまでの柄には自分が一番強く考えさせられたことを置き（例「母が子供のために行った行動」）、歯にはその観点を整理した（例：「母の行動（着物を米と交換する）」「田植え」「ヒロユキのお乳」）。

7月の学級活動「勉強方法を見直そう」では外部講師を招いて、上手な勉強方法についての講演を聴いた。生徒はその要点を、くまでチャート型のワークシートに書き込んだ（図7）。

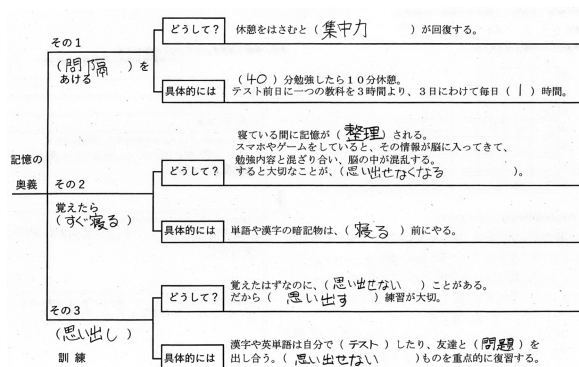


図7 勉強方法のコツをくまでチャートで整理する

## 検 証

実践の成果を5つの観点から多角的に検証する。

### 1. 全国学力・学習状況調査問題

半年間の実践が終了した時点で生徒の書く力を検証するために、12月に、全国学力・学習状況問題への解答を求めた。所要時間は次の2問を合わせて、約45分であった。47名が解答した。

#### (1) 根拠を明確にして自分の考えを書く

平成27年度のB[3]三を用いた。これは小泉八雲「貉」を読み、「……そして、それと同時に、屋台の火も消えた。」という最後の一文は、あった方がよいかない方がよいか、話の展開を取り上げて理由を書く(50字以上80字以内)という問題である。この問題の趣旨は「文章の構成や展開などを踏まえ、根拠を明確にして自分の考えを書くことができるかどうかをみる」である。本実践では根拠を明確に観点を挙げて書くことを学んでおり、書く力が獲得されたか評価するのに適した問題である。

解答にあたっては、A4判の白紙を1枚渡して、自由に使ってよいと指示した。また問題用紙には解答用紙と同じ80字分の原稿用紙罫が、下書き用として印刷されていた。

全国調査での正答率は31.7%であった。全国調査と同じ基準で採点した結果、正答率は76.6%と、全国水準を大きく上回っていた。下書き用の原稿用紙罫を用いた生徒は10名のみであり、うち3名は、マップあるいはメモを白紙に書いた上で、下書きを書いていた。くまでチャートを使った生徒はいなかった。問題文中にすでに、「最後の一文があった方がよいか、ない方がよいか」、「話の展開を取り上げて」、「理由」を書くというかたちで、文章に含めるべき観点が明示されていた。そのため、観点を立てて書くことを学んだ生徒たちにとっては書きやすく、ツールを利用しなくとも正答率が高かったのではないと思われる。また全国調査に比べると、解答時間を十分確保できたことも、成績が良かった一因であろう。

#### (2) 絵の鑑賞文を書く

平成26年度のA[7]は、歌川広重作「東海道五十三次 掛川」を鑑賞した中学生が、鑑賞文を書くという設定での問題である。問一では、下書きと付箋4枚を示し、下書きと付箋の対応を問う。問二では、下書きを読んだ友達のアドバイスをもとに書き直したという設定で、書き直された鑑賞文をもとに、アドバイスの内容を問う。解答はいずれも選択式である。

設問の趣旨は問一が「多様な方法で材料を集めながら考えをまとめることができるかどうかをみる」、問二が「書いた文章について意見を交流し、文章を書き直すことができるかどうかをみる」である。付箋を用



いて下書きを書くという点も、友達との交流を通して文章を書き直すという点も、11月の実践「絵画の魅力を伝えよう」と重なる。従って実践の成果を検証するのに適した問題である。

全国調査における正答率は、問一が84.9%、問二が72.6%であった。全国調査と同じ基準で採点したところ、正答率は問一が93.6%、問二が91.5%であり、全国水準を上回る成績となった。付箋を活用して鑑賞文を書いたり、互いに推敲し合ったりした学習経験が、この問題に解答するのに生かされたと思われる。

## 2. 生活習慣についての作文

文章を書く力が半年間で伸びたかを検討するために、「自分が考える良い生活習慣とは」という同一のテーマで2回、4月と11月（「絵画の魅力を伝えよう」の学習後）に、文章を書かせた。解答にあたって生徒には400字詰め原稿用紙（複数使用可）とともに、A4判の白紙を1枚渡して自由に使ってよいと指示した。所要時間は約45分であった。

2回とも文章を書いた46名について、筆者ら3名が独立に、4月と11月の作文を比較して評価した。誤字脱字などの表記、原稿用紙の使い方、文章の長さといった点は考慮せず、自分の考えが明確に書けている、段落を分けて適切な構成で書けている等の観点から、11月の方が意見文として総合的に優れているかを検討した。その結果、21名（全体の45.7%）は複数の評価者によって、「11月の方が優れている」と評価された。改善が見られた生徒は、春から秋にかけて書くことを繰り返す中で、分かりやすく書く力がある程度身についたのであろう。一方、改善していない生徒の文章では、一つの段落中に複数の内容が次々と書かれて、何を述べているのかわからなくなってしまっているものが多々見られた。

マッピング、くまでチャート、メモ（キーワードを箇条書きしたものや下書きに近いもの）の利用状況を検討した。表1に示すように、1組のみで、マッピングを用いた生徒が増えていた。

表1 マッピング等の利用状況（人数）

		マッピング	くまでチャート	メモ
1組 (24名)	4月	2	0	6
	11月	19	0	2
2組 (22名)	4月	4	0	3
	11月	3	2	3

マッピング、くまでチャート、メモの利用と、作文の改善との関連を検討した。結果を表2・表3に示す。例えばマッピングあるいはくまでチャートを、4月も11月も利用した生徒が5人おり、そのうち2人については、複数の評価者が「11月の方が優れている」と評価したことを示している。ツールの利用が改善に結びつくのであれば、4月はツールを利用しなかったが11月は利用した生徒で、改善率が高いことが予想される。しかし、そうならなかった。

表2 マッピングあるいはくまでチャートの利用と改善

利用状況	人数	作文の改善
春(4月)・秋(11月)とも利用した	5	2(40.0%)
春秋とも利用しなかった	21	11(52.4%)
春は利用しなかったが秋は利用した	19	7(36.8%)
春は利用したが秋は利用しなかった	1	1(100.0%)

表3 メモの利用と改善

利用状況	人数	作文の改善
春秋とも利用した	2	2(100.0%)
春秋とも利用しなかった	34	17(50.0%)
春は利用しなかったが秋は利用した	3	0(0.0%)
春は利用したが秋は利用しなかった	7	2(28.6%)

## 3. 「書くこと」に関するアンケート

文章を書くことに対する意識を次の7項目で問うた。①～③は、1（全然あてはまらない）～5（とてもよくあてはまる）の5段階で、④～⑦は、1（全然できていない）～5（とてもよくできている）の5段階で、回答を求めた。

- ①私は上手に作文が書ける。
- ②私は作文の授業で出される課題をうまくこなせる。
- ③私はいい作文の書き方について多く知っている。
- ④書き出す前に何を書くのかメモする。
- ⑤材料を集めたり、自分の知っていることをいろいろ思い出したりして、そこから大切なものを選ぶ。
- ⑥読みやすくするために、段落分けをする。
- ⑦段落と段落との関係が結びつくように書く。

調査は4月と11月（「絵画の魅力を伝えよう」の学習後）の2回、行った。2回とも回答した46名の結果を分析した。各項目の評定値について、学級×調査時期の分散分析を行った結果、項目④においてのみ調査

時期の主効果が有意であった ( $F(1, 44) = 7.734$ ,  $p < .01$ )、4月に比べると11月ではメモを書くことが定着してきたと言える (4月: 平均=2.52,  $SD=1.02$ , 11月: 平均=3.02,  $SD=1.09$ )。

4. 抽出生徒の変化

ここまでは学級・学年をまとめた検証であった。ここでは、書くことに苦手意識を持っている生徒を一名抽出し、半年間の変化を検討する。

抽出生徒Aはアンケートの回答や1学期の授業の様子から、文章を書くことに苦手意識を強く持っていた。自分から書き始めることが難しく、文章のテーマを巡って筆者と対話し、それを手がかりに書いていく様子であった。

1学期は、くまでチャートもほとんど書けない状態であった。しかし経験を重ねることで、次第に書けるようになっていった。6月の校外学習、11月の「絵画の魅力伝えよう」のくまでチャートを、図8・図9に示す。

ノコギリ屋根	場所
	店 お菓子家 カンク
	歴史

図8 Aが6月に作成したくまでチャート

魅力伝える 全監賞文	色 木の陰でベンチが目立っている。木・草・道が明るい色で朝昼のように感じた。自分の感想や根拠を適切に書き込んでいる。くまでチャートに書き込まれたメモは、実際の鑑賞文では「ベンチと木は木の木陰があるからこそベンチが目立ち木はベンチを目立たせる物としてあるのではないのでしょうか」等と表現されていた。	時間 朝の光が明るい色で朝昼の 木陰は暗い色で朝昼の 木陰は暗い色で朝昼の
	物 ベンチは木は木陰があるからこそベンチが目立ち木はベンチを目立たせる物としてあるのではないのでしょうか	物 ベンチは木は木陰があるからこそベンチが目立ち木はベンチを目立たせる物としてあるのではないのでしょうか

図9 Aが11月に作成したくまでチャート

6月の校外学習では、「ノコギリ屋根」という菓子店名を柄に挙げ、紹介する観点として「場所」「店」「歴史」を挙げている。この観点は、筆者が書画カメラで提示したモデルをまねて書いたものである。しかし内容はほとんど書けていない。それが11月には、

「色」「時間」「物」という観点を立てて、「木の陰でベンチが目立っている」「木・草・道が明るい色で朝昼のように感じた」など、自分の感想や根拠を適切に書き込んでいる。くまでチャートに書き込まれたメモは、実際の鑑賞文では「ベンチと木は木の木陰があるからこそベンチが目立ち木はベンチを目立たせる物としてあるのではないのでしょうか」等と表現されていた。

この生徒の書く力の変化を、生活習慣の作文で見よう (表記は原文のまま)。

【例5 4月】

ぼくは、よりよい生活習慣にするために考えました。

人は、ねる時間の平均が八時間とどこかで聞きました、そして、朝四時あたりで起きればいいと考えました。四時に起きるには八・九時にねればいいと思いました、ぼくは、つかれるとすぐねる時があります、でたまたま九時くらいにねました、起きたら四時半でした。でもたまたまだったかもしれませんが早起きできたのは、かわらいいので八時九時にねれば早起きできると思います。

なぜ四時に起きるかというですね、早やく起きおふろに入ったり、終わらなかった宿題をやったりして時間をゆうこうてきにつかえます。でも私はそのようなことができませんが努力していこうと私は思います。

私には、犬がいます、その子がですね、いやしになっています、でもですねインターホンの音か人がきますとほえてうるさいときがあります。ペットは、ですね食べるものによって死にいたりします。例えばですね、玉ねぎです犬には食べさせちゃいけないとお母さんがいっていました、犬はかわいいのですが

【例6 11月】

僕が考える生活習慣は、ねる食べることだと思います。ねることは、生活習慣にかかせないものだと思います。夜ふかしをして次の日学校で授業を受けているときはねむくなり、授業の内容や先生の言葉が聞きとりにくくなり頭がぼうとうとうとうとしてきてねてしまうこともありねずにいると、注意がうすれけがをしてしまうかもしれないということがあるかもしれないので、ねるということは生活において大切なものだと思います。

次に、ご飯についてです。飯は朝昼夜とあります。

飯の中で絶対食べたほうがいいのは朝ごはんです。朝を食べないというのは、エネルギーの源だからです。朝食を食べると、午後まで、やる気がでますし、栄養がとれます。今我々は、成長期だから、朝ごはんは、生活習慣にいれるとよりよい生活が、おくれるのではないのでしょうか。

4月は思い浮かんだことを羅列してどうにか文をつなげていったが、途中で終わってしまった。段落も分けてはいたが、明確に内容で段落を分けているようには読めない。しかし11月には一つの段落で一つの内容を書けている。

## 5. 他教科への転移

以上は、国語という一教科内での成果検証であった。次に、国語で育った力が他教科でも生かされるか検討する。

11月に「絵画の魅力を伝えよう」を実践した後、音楽科で鑑賞の授業が行われた。生徒は「赤とんぼ」（作詞・三木露風、作曲・山田耕筰）を4通りの演奏で聴いた。演奏を聴く前に教員から「音楽の感じ・雰囲気」「声の感じ・歌い方」「演奏形態（人数・伴奏楽器）」「構成（前奏―間奏―後奏、反復）」「速さ・強弱（曲全体、途中）」という5つの観点が示された。生徒は4つの演奏について5つの観点をメモをとり、一番気に入った演奏を選んで、そう考えた理由を観点に即して書いた。

### 【例7】

私のお気に入りの「赤とんぼ」の演奏は2番です。なぜかという、前奏で、心おだやかに、ふわふわとなり、その後には明るくてきれいな歌になるので、前奏でとても印象的でした。楽器も、「1」と違って、バイオリンの響く美しい音色がきれいでした。やさしいけど明るい雰囲気が好きです。バイオリンも、とても強弱があってすごく美しかったです。前奏や間奏が長くなっていることで、時が流れていく様子が伝わってきました。バイオリンだけでなく、ギターも入っていて、バイオリンとギターがうまく重なってとても美しい演奏でした。

この生徒に限らず、生徒たちは観点を生かして根拠を明確にして、鑑賞文を書くことができた。国語科の実践直後なので取り組みやすかったとも考えられるが、国語科の実践が他教科に生かされた、すなわち転

移したことを示すと言える。

## 考 察

### 1. 手立てと成果

本研究では、文章を書くことに対して生徒が苦手意識を持っており、実際に書けないという課題に対して、マッピングやくまでチャートという思考ツールを生かして、書き方を指導した。また書画カメラで書き方のモデルを提示したり、「ご近所タイム」で互いの書き方を参考にしたりすることで、思考ツールの使い方が学びやすいようにした。

こうした手立てを取り入れて実践を重ねた結果、「検証」で示したように、生徒の書く力が伸びた。こうした成果が得られた大きな要因は、マッピングやくまでチャートという思考ツールを取り入れ、文章を書く前の段階から、生徒と教師、生徒同士が書くプロセスを共有できたことであろう。それにより、生徒が何を迷っているのか、どう考えているのかが可視化され、教師の側から適切な支援をタイミングよくできた。また全員が同じツールを用いているため、ご近所タイムで他者の書いたものを参考にしやすかった。さらに、同一のツールを繰り返し使うことで、教師も生徒もその活動に慣れていったことも、成果の一つの要因である。

### 2. 課題

しかし幾つかの課題が残った。

「検証」で明らかになったように、4月と11月で同じテーマの作文を書かせたが、作文として改善されていたのは半数程度であった。その背景に、マッピングやくまでチャートなどの思考ツールが、まだ使いこなせていないことが挙げられる。11月に実施した「生活習慣」作文の下書きに、これらがあまり用いられていなかった。また思考ツールの利用と作文の改善との間に、関連性は見られなかった。生徒は思考ツールを使うことで、どう書けばよいか知ることができた。しかしその方法を自発的に利用したり、使いこなすレベル（植阪、2010）には達していないのである。生徒がいまだ思考ツールの有効性を実感できていないのか、思考ツールのコスト感を感じて利用しなかったのか等、検討の余地がある。また、思考ツールの利用について

学級間で大きな差があった。このことについても検討が必要である。これらの点については、授業後に生徒自身に思考ツールの使い勝手やコスト感などを聞きとることで、改善のヒントが得られるだろう。

教師側の課題もあった。各種の思考ツールをどの場面でどう用いるか、吟味が十分でなかった。マッピングは書く内容を考えたり広げたりするツールとして便利である。これに対してくまでチャートは、内容を整理するのに適している。しかし7月の実践「『おすすめの一冊』を紹介しよう」では、こうした違いを深く考慮することなく、1組ではマッピング、2組ではくまでチャートを取り入れた。

また11月の実践「絵画の魅力を伝えよう」では、付箋を用いて書く内容を挙げていき、それをワークシート上で整理することで、観点を立てて内容を整理することもできた。にも関わらず、さらにくまでチャートで観点を立てるという二度手間をかけた。「実践」で述べたように、付箋とくまでチャートでは書かれた内容が変化しており、それぞれのツールに一定の有効性はあったとも言える。しかし書くことが苦手な生徒にとっては、文章を書くまでの途中経過が長く複雑なものに感じられ、思考ツールのコスト感を高めたかもしれない。

### 3. 今後に向けて

文章を書くことは、国語科だけの学習課題ではない。例えば、数学科における論理的証明、理科における実験と考察の報告、社会科における説明など、あらゆる教科で論理的に書くことが求められる。国語科における「書くこと」は、それらの基礎として、汎用的

な能力を育てる学習と位置づけることができる。生徒が国語での学習を生かして音楽で鑑賞文を書けたことは、その一つの証左である。

本研究で生徒は、思考ツールというものの存在を知り、それを使うことで文章が書きやすくなることを経験した。しかし思考ツールを自発的に使いこなすまでには至らなかった。思考ツールの有効性を生徒が実感し、様々な場面での文章作成に自発的に活用できるよう、今後も実践を積み重ねたい。

### 引用文献

- 市川伸一 (1993). 問題解決の学習方略と認知カウンセリング 若き認知心理学者の会 認知心理学者 教育を語る 北大路書房 pp.82-92.
- 佐藤浩一 (2013). メタ認知【理論編】 佐藤浩一 (編著) 学習の支援と教育評価—理論と実践の協同 北大路書房 pp.88-100.
- 田村学・黒上晴夫 (2013). 考えるってこういうことか! 思考ツールの授業 小学館
- 椿本弥生 (2014). 論理的に書くための「型」 犬塚美輪・椿本弥生 論理的読み書きの理論と実践—知識基盤社会を生きる力の育成に向けて 北大路書房 pp.74-88.
- 植阪友理 (2010). メタ認知・学習観・学習方略 市川伸一編 現代の認知心理学5 発達と学習 北大路書房 pp.172-200.
- Zimmerman, B. J., & Kitsantas, A. (2002). Acquiring writing revision and self-regulatory skill through observation and emulation. *Journal of Educational Psychology*, 94, 660-668.

(注) 本研究は第一著者による平成30年度群馬大学教育学研究科専門職学位課程課題研究報告書『自ら構想・構成を考え説明的文章を書く力を育てる中学校国語科の実践〜コツの教授と活用の工夫を通して〜』に基づく。

(よしだ かずき・さとう こういち・たむら みつる)